応援してくれる人たちの顔がよく浮かんできます
一人じゃないと思えるから頑張れます

おおむらあすみ
第16回アジア競技大会カヌー競技女子銀・銅メダリスト。本町田代出身。川根高校在学時代からジュニア日本代表として数々の大会で優勝を飾る。早稲田大学進学後、めきめき頭角を現し、２年生でシニア日本代表に選出される。ロンドン五輪出場を目指し練習に励む21歳。

厳しい練習やハードな日程

年間だいたい200日くらい海外で生活しています。外国で1カ月間トレーニングを積んで、帰国せずに別の国の大会に出場することもざらにあります。今年の世界選手権（ポーランド）では、大会前の約1カ月間、メキシコでの高地トレーニングに励み、その後ハンガリーに移動して体を平地に慣れさせ、日本に戻ることなくポーランドに乗り込みました。

日本代表の合宿では、厳しい練習に音を上げそうになることもあります。コーチの指示通りにできなくて、くやしい思いをしたことも一度や二度じゃありません。でもわたしは一人じゃないから。兄や仲間がいて、応援してくれる人がいて、みんなと一緒に支え合っていると思えるから、壁を乗り越えられるんです。

海外の大会を経験してたびたび感じることは「外国人との体格の違い」です。わたしは日本人の中では身長が高い方（168㌢）ですが、線が細くて…。外国人とは比べようもありません。ウエイトが足りないんです。筋肉が付きにくい体質なんじゃないかなと思います。

一般的に、カヌーは上半身のみを使うスポーツだと思われがちですが、実際は全身運動なんです。上半身、下半身、どちらが欠けてもダメ。バランスのとれたトレーニングが必要です。今後、年末年始を含む約1カ月間、東京都の国立スポーツ科学センターで、自己データを分析しながらトレーニングしていきます。

昨年メキシコで実施した高地合宿では、思うようにいかないことがあり、かなり落ち込んでいました。その夜ベッドで見たインターネット。日本の高校総体（インターハイ）の速報が出ていました。カヌー競技を検索すると、なんと決勝進出校に「川根高校」の名前があったんです。ものすごく興奮しました。頑張っている川高カヌー部員たちの顔が浮かんでくるような気がして、その後出場した世界選手権では高いモチベーションで挑むことができました。

夢へ向けて、再び「前」へ

今回出場したアジア競技大会では、金メダルを目指していました。心の中では「いける」と思っていただけに、中国の選手に力及ばずくやしい思いをしました。わたしがもっとペアの北本さんをカバーできればよかったんですが…。

でも中国との力の差を実感できたのは収穫だし、自分たちの課題もレースごとにはっきりとしてきました。

２人乗りでペアを組む北本忍さん（富山県体育協会）は、日本代表の中でダントツの強さ。北京オリンピックでは6位入賞するなど、世界に通用する第一人者です。わたしはまだまだ北本さんに遠く及びません。筋力はもちろん、テクニックも、水をつかむタイミングも、試合にのぞむ心の強さも。

わたしはまだ世界ではノーマークの存在です。でもそこに、つけいる隙がある。今後、わたしたちがどれだけ記録を伸ばせるかは、わたしがどれだけ成長できるかにかかっていると思います。

来年８月に開催される世界選手権は、その成績がオリンピックの出場枠に大きく影響する大会です。「オリンピック出場」という夢を実現するため、選手権には万全の体制で臨みたいと思っています。

小学２年生から始めたカヌー競技。この13年間、わたしにさまざまなものを与えてくれました。夢を持つ大切さを知り、さまざまな国の空気に触れ、いろんな試合を経験してきました。中でも一番大切だと思えるのが「人との出会い」なんです。ライバル、仲間、コーチ、スタッフ、そして応援してくれる人たち。そんな出会いの数々が、いつもわたしを成長させてくれるし、心を支えてくれます。

レース前には、日本で応援してくれる人たちの顔がよく浮かんできます。感謝の気持ちで、ゴールを見つめています。

取材を終えて

大村朱澄さんは、わずかな滞在時間の中、本紙の取材に快く応じてくれた。「コーチの指示通りにできなくて、くやしい思いをすることもたくさんあります。でも、わたしは一人じゃないから。支えてくれる仲間、応援してくれる人たちがいる。みんなと一緒だと思えるから、厳しい練習も乗り越えられるんです」と話してくれた。

今回取り上げた人たちにも、同じことが言えるような気がする。ゆず生産を手がける野口直次さんや森づくりを実践する森下一淑さんには、志を同じくする先輩や仲間がいた。みどりの丘には、共に一つのものを作り上げる仲間の輪があった。前田宥さんや柚本金一さんのそばには、優しく見守る奥さんの笑顔があった。

森下一淑さんが話した「支え合って仕事ができるから幸せ」という言葉が、強烈に印象に残った。

「人は一人では生きていけない」。当たり前のように使われる言葉だが、改めてその重みを考えた。誰かを支え、誰かに支えられているから、人は「わたしらしく」輝けるんだと実感した。